

ジャコモ・プッチーニ (1858~1924)

(Giacomo Antonio Domenico Michele Secondo Maria Puccini)

作曲家／イタリア・オペラ史上に輝く最後の巨星

愛を貫くドラマチックなヒロインや、理想に生きる恋人たちの悲劇を描く『マノン・レスコー』、『トスカ』、『蝶々夫人』、『ラ・ボエーム』、中国の宮廷を舞台にした“誰も寝てはならぬ”など今もさまざまなメディアで使われるメガヒット・アリアで知られる『トゥーランドット』など世界中で今も上演され続けている作品で知られる。

1858年、イタリア、トスカーナ地方の音楽家の家に生まれ、亡き父の跡をついで、14歳で大聖堂のオルガニストに就き、作曲の勉強を始める。

18歳でイタリア・オペラの巨人、ヴェルディの『アイーダ』を見てオペラ作曲を志す。22歳で奨学金を得てミラノ音楽院に入学したが、26歳で応募したオペラ・コンクールでは落選。が、このとき私的なパーティーで演奏しているところを、今も世界的音楽出版社であるリコルディ社の創業者、リコルディに認められ、生涯の交友が始まる。

1886年、28歳で妻エルヴィーラとの間に息子誕生。だが2人の婚姻が正式に認められたのは、18年後、まさに『蝶々夫人』初演の1904年まで待たなければならなかった。1893年、『マノン・レスコー』初演で大成功を収め、ついに35歳にして『ヴェルディの後を継ぐ者』としての名声を国内外に広め『ラ・ボエーム』『トスカ』と、オペラ史上に輝く名作を立て続けに発表した。

そして1900年ロンドンで、妻とともに芝居の『マダムバタフライ』を観劇して魅了され、早速作曲を開始する。ときはまさに世紀末から20世紀への移り変わりの中で、ヨーロッパでは浮世絵などが紹介され、“東洋の神秘の国、日本”の文化が芸術家たちのイメージネーションとインスピレーションを刺激する“ジャポニズム”の風が吹き渡ったころだった。

が、1904年、アルトゥーロ・トスカニーニを指揮にすえてのミラノ・スカラ座での初演は大失敗。手を入れて別な劇場で再演し、3か月後に大成功を収める。初演の失敗はすさまじいもので、理由については今も陰謀説などさまざまな説がある。このときのショックをプッチーニは忘れず、以後決して『蝶々夫人』のスカラ座での上演を許可しなかったという。

1921年、大作『トゥーランドット』作曲を開始するが、未完のまま65歳にして、喉頭がんのため入院先のブリュッセルで死す。めくるめくドラマと甘美な旋律に満ちたその作品は今も世界中の劇場で上演され、愛され続けている。

